

小学館
からの
お知らせ

1/4

速報

第19回

「小学館ノンフィクション大賞」 最終選考結果のお知らせ

大賞

『R130-#34 封印された写真——ユージン・スミスの「水俣」』
山口由美(やまぐち・ゆみ)

優秀賞

『マオキッズ 毛沢東のこどもたちを巡る旅』
八木澤高明(やぎさわ・たかあき)

小学館は本日、『週刊ポスト』『女性セブン』『SAPIO』3誌主催による「第19回小学館ノンフィクション大賞」の最終選考会（午後5時から、山の上ホテル）を行い、受賞者を決定いたしました。

今回は大賞に山口由美『R130-#34 封印された写真——ユージン・スミスの「水俣」』、優秀賞に八木澤高明『マオキッズ 毛沢東のこどもたちを巡る旅』を選考しました。

大賞受賞者には賞金として500万円が、優秀賞受賞者には100万円が贈られます。
なお、贈賞式は8月31日（金）午後6時30分から、東京會館にて行う予定です。

【お問い合わせ先】〈本日20時30分まで〉 広報室／電話03-3230-5870

〈30日以降〉 小学館ノンフィクション大賞事務局 工藤／電話03-3230-5801

第19回

『小学館ノンフィクション大賞』
最終選考結果のお知らせ

主催 (株)小学館 週刊ポスト／女性セブン／SAPIO

大賞

『R130-#34 封印された写真——ユージン・スミスの「水俣」』

山口由美(やまぐち・ゆみ)49歳

【プロフィール】

1962年9月15日、神奈川県箱根町生まれ。慶應義塾大学法学部卒。会社勤務後、ホテル・海外旅行専門誌の記者を経て、ホテル、建築、近現代史などのノンフィクションを手がける。著書に『箱根富士屋ホテル物語』『帝国ホテルライト館の謎』『消えた宿泊名簿 ホテルが語る戦争の記憶』など。

【梗概】

20世紀を代表する写真ジャーナリズムの巨匠、ユージン・スミス。彼の代表作であり、人生最後のプロジェクトでもあったのが写真集「水俣」だ。なかでも有名なのが、水俣病患者の娘をいとおむように抱く母の姿を写した「入浴する智子と母」の1枚だろう。だがこの写真は現在、両親の意向を受けて新たな出版や展示が出来ない、「封印」された写真となっている。

ユージン・スミスは日本との関わりが深い写真家だった。太平洋戦争では、サイパン、硫黄島などに従軍、沖縄で重傷を負った。1961年に日立に招聘されて日本に滞在したユージンは、再度日本で漁村を撮りたいという思いを残していた。その後、日立の仕事で知り合った日本人の話に触発され、31歳年下の日米混血の女子大生アイリーンを伴って1971年に再来日。満身創痍の体で3年間にわたって「水俣」を撮影した。

「水俣」のプロジェクトは、来日後に妻となったアイリーン・スミスとの共同作業だったが、実は、もうひとり重要な役割を果たした日本人アシスタントが、写真家の石川武史である。筆者は石川と水俣を再訪し、さらにユージンが亡くなった場所である米国アリゾナ州のツーソンを訪ねる。アリゾナ大学のCCP (Center for Creative Photography) には、「水俣」に関する膨大な資料が収蔵されていた。

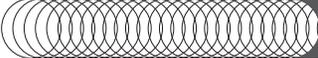
そこで見つけたアイリーンの記録していたノートには、「水俣」で撮影された560本のフィルムについての記述があった。タイトルのR130-#34とは、「入浴する智子と母」の写真が130ロール目の34枚目だったという意味である。

「入浴する智子と母」はどのようにして撮影され、なぜ「封印」されるに至ったのか。ユージン・スミスの「水俣」とはどのような日々だったのか——。

第19回

『小学館ノンフィクション大賞』
最終選考結果のお知らせ

主催 (株)小学館 週刊ポスト／女性セブン／SAPIO

 優秀賞 『マオキッズ 毛沢東のこどもたちを巡る旅』
八木澤高明(やぎさわ・たかあき)40歳

【プロフィール】

1972年5月19日、神奈川県生まれ。帝京大学文学部史学科中退。写真週刊誌フライデー専属カメラマンを経て、フリーランス。2001年ネパール共産党毛沢東主義派を取材し、毛沢東に興味を持つ。写真集に『フクシマ2011、沈黙の春』などがある。

【梗概】

2001年8月、私はノビナという名の一人の女性兵士を取材した。彼女はネパール共産党毛沢東主義派の女性兵士だった。1996年よりネパールで武装闘争を開始したネパール共産党毛沢東主義派は、既に忘れ去られたような毛沢東思想を骨子として、経済的に貧しいネパールの中でもさらに貧しい西ネパールの山村を中心にじわじわと支持層を広げていた。政府軍との戦闘の中で銃を取っていた兵士の一人が彼女だったのである。当時の年齢は18歳だった。その後、彼女は戦闘が激化する中で戦死。ネパールで1人の女性兵士の生と死を目の当りにして、私は毛沢東の存在を意識させられたのである。

山村から都市を包囲するという毛沢東のゲリラ戦術は、中国だけでなくアジア各国に大きな影響力を及ぼした。フィリピンではいまだに毛沢東思想を信じ、戦い続けるゲリラたちがいる。日本では、1950年代に日本共産党が山村工作隊を組織し、奥多摩や山梨の山間部で活動した。1970年代には、連合赤軍が山岳ベースに籠り武装闘争を試みるが、同志を殺害するなどして自壊していった。カンボジアでは、毛沢東思想の影響を受けたポル・ポトが、通貨を廃止し、都市住民を農村へ移住させるなど極端な共産主義の実現を目指して、200万人とも言われている犠牲者を出した。

私はネパールを皮切りに、中国、フィリピン、カンボジア、日本を巡る旅に出た。私は毛沢東がもたらした革命闘争が、それらの国に暮らす人々に何をもたらしたのかを知りたかったのだ。

【第19回「小学館ノンフィクション大賞」について】

19回目を数える今回は、本年4月末日に募集を締め切り、300作品を超える力作が寄せられました。この中から次の4作が、本日午後5時から山の上ホテルで開かれた最終選考にかけられ、椎名 誠、関川夏央、高山文彦、二宮清純、平松洋子の各選考委員により受賞作が決定いたしました。

【最終候補作】

- 『断絶 —瀬古利彦と中村清がいた時代—』
高川武将
- 『マオキッズ 毛沢東のこどもたちを巡る旅』
八木澤高明
- 『R130-#34 封印された写真——ユージン・スミスの「水俣」』
山口由美
- 『忘れられた響き ~木琴王 平岡養—』
通崎睦美

- 賞金：大賞=500万円（複数受賞の場合は分割） 優秀賞=100万円
- 発表：受賞作は8月中旬発売の『週刊ポスト』『女性セブン』『SAPIO』誌上、および小社ホームページで発表いたします。受賞作は単行本として刊行予定です。
- 選考委員：椎名 誠（作家）、関川夏央（作家）、高山文彦（作家）、二宮清純（ジャーナリスト）、平松洋子（エッセイスト）
- 贈賞式：2012年8月31日（金）午後6時30分から東京會館にて挙行予定

【小学館ノンフィクション大賞】

「小学館ノンフィクション大賞」は、1993年、創刊25周年を迎えた『週刊ポスト』が『SAPIO』とともに、21世紀へ向け新しい感覚で時代を切り拓いていく新進気鋭のライターの登龍門となるべく、「21世紀国際ノンフィクション大賞」として新設、第7回より「小学館ノンフィクション大賞」と改称したものです。受賞作は『狂気の左サイドバック』（第1回）、『乳房再建』（第2回）、『絶対音感』（第4回）、『まぐろ土佐船』（第7回）、『ネグレクト』（第11回）など、このジャンルでは異例のベストセラーとなっていることから、当賞がノンフィクションの新しい地平を拓き、新しい才能を発掘するものであることを示していると自負しております。募集作品は未発表作品に限り、海外冒険旅行や、博物誌、観察記、歴史発掘、ビジネスドキュメント、スポーツドキュメント、科学ドキュメントなど、さまざまな視点から「時代」を捉えたものを、国内外を問わず広く世界から求めます。原稿枚数は、400字詰め原稿用紙300枚程度で、応募資格は、プロ、アマ、性別、国籍、年齢は問いません。